

学部長あいさつ ～学部の近況～

人文社会科学部長 清塚 邦彦



人文学部は2017年の4月から人文社会科学部に生まれ変わりました。約半世紀にわたる歴史の幕引きと想いと寂しくなりますが、もともと人文学部の実質は人文科学と社会科学が両輪でした。今回の改組は、学部の本体を維持しながら、そこに幾つかの新しい教育の仕組みを取り込んで強化したものを見るほうが正確です。

改組の委細については別に紹介する機会がありますので、ここでは、改組と並行して進めてきた最近の取り組みの中から、代表的な2、3の事例を簡単にご紹介しましょう。

学部の看板であるナスカ研究の関連では、一昨年4月にペルー文化省との間で遺跡保存協定を結んだのが大きな出来事でしたが、昨年も講演会や新たな地上絵発見の報告などがあいつぎました。さらに、拠

点となるナスカ研究所の教育研究機能を強化し、また遺跡保存や観光に向けた地元社会との交渉機能を一層強化するため、今年度からは常駐研究者を増員することとなりました。

同じ南米の絡みで言いますと、本学では一昨年から、文科省の世界展開力推進事業の一環として、南米のペルー、ボリビア、チリ3国の大学との間で学生の相互交流を推進する「ダブルトライアングル・プログラム」を実施しています。昨年度からはその推進本部がペルーでの研究実績のある本学部に移されました。その関連で、昨年は学生交流に加え、ペルー・カトリカ大学での本学サテライトオフィス開設、関係大学の担当者を本学に招いての検討会開催など、活発な活動を展開しています。

本学部ではこの他にも国際交流の拡大に向けて準備を続けています。これまで実績のあるフィリピン、台湾、オーストラリア等に加え、昨年度からは新たに東南アジアに本格的な学生交流拠点を作るプランが具体化してきました。

社会科学分野では、昨年度はこれまでにない事業として、きらやか銀行との連携で「きらやかマネジメントスクール」を開設しました。これは通常の授業とは別に地元で活躍中の事業主の方々を対象に独自の実践的教材を作り出そうとするもので、地域に密着した教育の新しい形を模索するものです。その成果はもちろん大学での普段の授業にもいろいろな形で還元されるはずですが、

以上急ぎ足でご紹介しましたが、他にも学部のいろいろなところで特色ある試みが重ねられています。それらについては三つの附属研究所からの近況報告のほか、学部HPでの報告記事などでご覧いただけます。ぜひご覧ください。



(左)ペルー・カトリカ大学 ルビオ学長 (右)清塚学部長

ナスカ研究所活動報告

人文社会科学部附属ナスカ研究所副所長 坂井 正人

ナスカ研究所の活動(平成26年)について、Agora47巻1(2015年4月)で報告させていただきました。そこで、それ以降の活動(平成27年と28年)について、今回は報告したいと思います。

(1)ペルー文化省と山形大学の間で、ナスカの地上絵に関する学術協力と保護等を目的とする「特別協定書」を平成27年4月23日に締結しました。(2)山形大学公開講座(人文学部)「世界遺産ナスカの地上絵:学際的アプローチの成果と展開」を6月に5回にわたって実施しました。(3)山形県立中央病院においてナスカ研究所パネル展を6月14日～7月24日に開催しました。最終日には記念講演会(100名参加)を実施しました。(4)ナスカ市街地の近郊で発見した24頭の動物の地上絵に関する記者会見を7月7日に行いました。(5)第55回アメリカン国際会議(エルサルバドル・7月13日)において、イタリア調査団と共同でシンポジウムを開催しました。(6)ナスカでの現地調査を平成27年9月～平成28年2月に実施しました。(7)Museo Arqueológico Antonini(ペルー共和国)において、イタリア調査団と共同でシンポジウムを平成27年9月5日に実施しました。(8)企画展「ナスカの地上絵:山形大学人文学部附属ナスカ研究所の成果から」を文翔館において平成28年2月14日～3月13日に開催しました(6919名来場)。この展覧会を記念して学術講演会(2月14日と3月6日)を実施し、ナスカ研究所の教員およびカリフォルニア

ルニア大学UCLA校のケビン・ボーン副所長が発表しました。(9)円卓会議「Round Table Conference on Nasca」を3月7日に山形大学人文学部において実施しました。(10)学術講演会「コトシユからナスカへ」を藤井龍彦名誉教授(国立民族学博物館)を迎えて4月15日に人文学部で実施しました。この講演会は、藤井先生の蔵書(約2000冊)をナスカ研究所に対して寄贈されたことを記念して開催されました。(11)「舌を伸ばした動物」の地上絵に関する記者会見を4月22日に行いました。(12)ナスカでの現地調査を平成28年6月～平成29年1月に実施しました。この調査には、米国Tulane大学が参加しました。(13)ナスカ市街地の近郊で発見した41頭の動物の地上絵を保護するために、ペルー文化省と共同で、この地区の遺跡公園化に着手しました。11月18日には現地説明会を実施しました。



山形大学が発見した地上絵を保護するために設置された看板



遺跡公園の現地説明会の参加者たち

映像文化研究所の行く年来る年

人文社会科学部附属映像文化研究所 所長 西上 勝

人文学部附属映像文化研究所では、映画研究部門と山形映像文化研究部門の2つの部門に分かれ、平成28年度に各々独自の研究活動実績を積み重ねてまいりましたが、来年度に向けても平成28年度の実績に基づいて、さらに充実すべく研究を推進してまいります。今後とも引き続きご支援頂きますようお願い致します。

両部門の活動実績とこれからの計画について、両部門長に詳しく以下に紹介して頂きます。

映画研究部門の活動

映画研究部門長 大久保 清朗

映画研究部門では、平成28年度におきましては、フランスの映画批評家であるアンドレ・バザンの仕事を総合的に再検討することを目的とした「アンドレ・バザン研究会」を立ち上げました。日本全国の映画研究者に呼びかけ所員として参加していただき、日本学術振興会科学研究費基盤Bを申請しました。こちらは年度内に、年会誌「アンドレ・バザン研究」第1号を刊行し、バザンの未邦訳のテキストや所員の研究論文を発信する予定です。また、平成29年1月には、「柳下美恵のピアノdeシネマ」と題して、山形コンベンションビューロー、山形国際ドキュメンタリー映画祭と提携し、サイレント映画のピアノ生演奏付き上映会を企画しました。以上のような内容を、次年度以降も継続推進して参ります。また山形国際ドキュメンタリー映画祭開催中は、映画祭との提携企画を予定しております。また他に28年6月に市民向けの公開講座「映画・写真・絵画・文学におけるドキュメンタリーとフィクション」を行いました。引き続きご支援、よろしくお願い申し上げます。



山形映像文化研究部門の活動

山形映像文化研究部門長 石澤 靖典

山形の地域映像文化をあつかう山形映像文化研究部門では、平成28年10月16日に人文学部にシンポジウム「近代都市の相貌—明治山形の写真・絵画・建築」を開催いたしました。当日は4名の研究者を中心に、明治期山形の初期写真や絵画について、おもに地方都市の近代化という観点から議論をおこないました。また年度末には、一昨年開催した「没後100年記念 菊池新学シンポジウム—東北初の写真家、菊池新学と山形の写真文化」の報告書を刊行し、その成果を公開いたしました。今後こうした地域写真史を軸とする調査をすすめる予定ですが、幸い、所員の森岡卓司を代表者として平成28年度日本学術振興会科学研究費・基盤研究(B)に申請していた課題「東北地方における写真文化の形成過程と視覚資料の調査研究」が採択され、平成32年度までの5年にわたり、山形を中心とする東北の写真文化を総合的に研究する道筋がつけられることとなりました。平成29年度は、その一環として、明治・大正期の地域写真に関する調査を、県内外の研究者や諸機関と連携しつつ積極的に推し進め、研究会やシンポジウムのかたちで情報の共有と発信をおこなう予定です。



やまがた地域社会研究所の活動… いま、そして、これから

人文社会科学部附属地域社会研究所 所長 是川 晴彦

やまがた地域社会研究所では地域の抱える課題の解決に向けた調査・分析を進めています。また、山形県の市町村との連携事業の窓口となって、地域に関する研究教育のコーディネートも行っています。今回は、平成28年度の特徴的な事業について紹介します。

1. 国道347号線の通年通行による地域活性化効果の調査・研究

この調査・研究は、尾花沢市・大石田町広域連携推進協議会から委託されたものです。冬期閉鎖されていた国道347号線は平成28年から通年通行が可能となり、尾花沢市、大石田町の交流人口の増加が期待されます。そのため、通年通行によって生じる影響や、両地域の活性化に繋げる手法について調査・分析を行うことになりました。

調査・研究の主な内容は、(1)通行量調査による利用実態の把握と分析、(2)尾花沢市、大石田町の観光施設でのヒアリング調査によるニーズ等の把握、(3)物流への効果に関する調査分析、(4)国道47、48号線との比較を通じた国道347号線の特徴と意義の分析、(5)地域の活性化に与える効果と活性化に求められる視点や取り組みの考察、などです。

通行量調査では、車両ナンバーの県別分類や乗車人数の整理など従来の調査にない視点も加え、国道347号線の利用実態の正確な把握に努めました。また、観光施設の調査では学生も参加させ、若い世代の視点から活性化に必要な取り組みなどを考えてもらいました。

上記の調査内容を踏まえ、不足する資源や活性化に必要な政策等の分析を進め、平成28年度末には成果報告書としてまとめる予定です。



大石田町における調査



東北中央自動車道建設に関する現場公開授業

2. 東北中央自動車道建設に関する現場公開授業の実施

平成28年10月にはNEXCO東日本のご協力を得て、東北中央自動車道建設に関する学生向け現場公開授業を実施しました。

NEXCO東日本の方から東北地方における高速道路の実態、高速道開通の多様な効果などについて説明していただいたのち、トンネルやインターチェンジを建設している工事現場を視察させていただきました。

学生たちは、日常生活に多様な面から高速道が貢献していることを事例や数値を通じて知ることができました。また、通常では見ることができない貴重な工事現場を見学することができ、高速道建設の実態や意義を理解する大変貴重な機会になりました。

3. 平成29年度に向けて

平成29年度も国道347号線について通年通行化前後の比較分析を進める予定です。また、少子高齢化、地方創生、まちづくりなど地域が今日抱える課題についても研究を行う予定です。解決したい課題等がありましたらお声をかけていただければ幸いです。